

弥生時代の石剣の分類と操作概念

中川和哉

1. はじめに

弥生時代になると近畿地方においても、対人殺傷用の武器として石剣が出現する。日本列島では、石剣が出現する以前の時代にも、愛媛県上黒岩岩陰遺跡の縄文時代早期人骨例に見られるように争いは存在したものと考えられるが、殺人専用の石器は存在しておらず、狩猟用の道具が利用されていたと想定できる。石剣の登場は、単に石器の1器種が増えただけではなく、条件付で殺人を肯定、準備する思想が入ってきたことにほかならない。石剣研究は弥生時代の争いの実像を考えていく上で、重要な手がかりとなる。しかしながら、石剣研究においてはその名称、分類において多くの基準があり、その大半が素材や、限られた地域内での研究に終始している場合が多い。

石剣には銅剣形石剣・鉄剣形石剣・朝鮮式磨製(有柄式)石剣・打製石剣がある。これらは製作技法の違いから、磨製のもの^(注1)と打製のもの^(注2)とに二分して個別に論じられることが多い。また、近畿地方でよく見られる打製石剣は、磨製石剣とは異なり大型尖頭器の1類型として扱われることが研究史の中では主流である。打製のものはおもに、安山岩(サヌカイト)^(注3)を利用して^(注4)いる。この石材は、旧石器時代以来、近畿中央部・瀬戸内地域の打製石器の主要な石材として利用されており、金属や木材に比べ可塑性が低く、硬質で研磨整形に適さない。大型尖頭器として分類される理由には、石剣に適した法量を持つものと、小型で手に持つことは出来ないが、石鏃に比べ明らかに大型な一端が尖る石器が存在することによる。大阪府鬼虎川遺跡第7次発掘調査では、打製の石戈が着柄された状態で出土している。このことによって大型尖頭器には石戈が含まれていることが明らかになった。打製尖頭器のわく組の中で論じる限り、磨製石剣との関係が不鮮明になり、焦点がかみ合わない。

また、前述したように可塑性が低いサヌカイトでは石剣の一端を尖らせ両側辺に鋭い刃部を形成するために、剝片を素材に用い背腹両面からの加撃によって整形・調整加工を施している。それゆえ形態的に似たものは、その未製品の段階においては判別が非常に困難であり、未製品は完成品に比べ法量が思いのほか大きいことも少なくない^(注5)。

いわゆる大型尖頭器には、石剣・石戈・石槍(石矛)・石剣未成品・石戈未成品・石槍(石

矛)未成品・石小刀の未成品などが含まれている可能性が非常に高い。完成品のみが含まれているのであれば、その形態分類に一定の意味が生じるのであろうが、完成品と未成品の区別する判断基準があいまいな状況下においては、形態による分類自体に意味がない。特に遺跡近くでサヌカイトを入手できる遺跡ではなおさらである。

打製尖頭器の一部が石剣であることは間違いないが、他のものと区別する特徴的な加工には、基部から両側辺に施される刃潰し加工がある。また、刃部と柄部の二次加工の様子が若干異なっている。唐古・鍵遺跡^(注6)13次調査では木製の鞘に入り蔓が柄部に巻かれた石剣、鬼虎川遺跡^(注7)第7次調査では握り部に蔓の巻かれた石剣が出土している。使用例を示す出土例があることと、二上山から離れた地域である京都府下出土の打製石剣^(注8)の特徴から考えると、両側辺の基部側に刃潰し加工を持たないものは石剣に含めず、打製石剣は尖頭器から切り離して石剣という器種の中で論じていくことが重要である。刃潰し、面取りは磨製石剣と共通の柄部の加工である事も論拠となる。

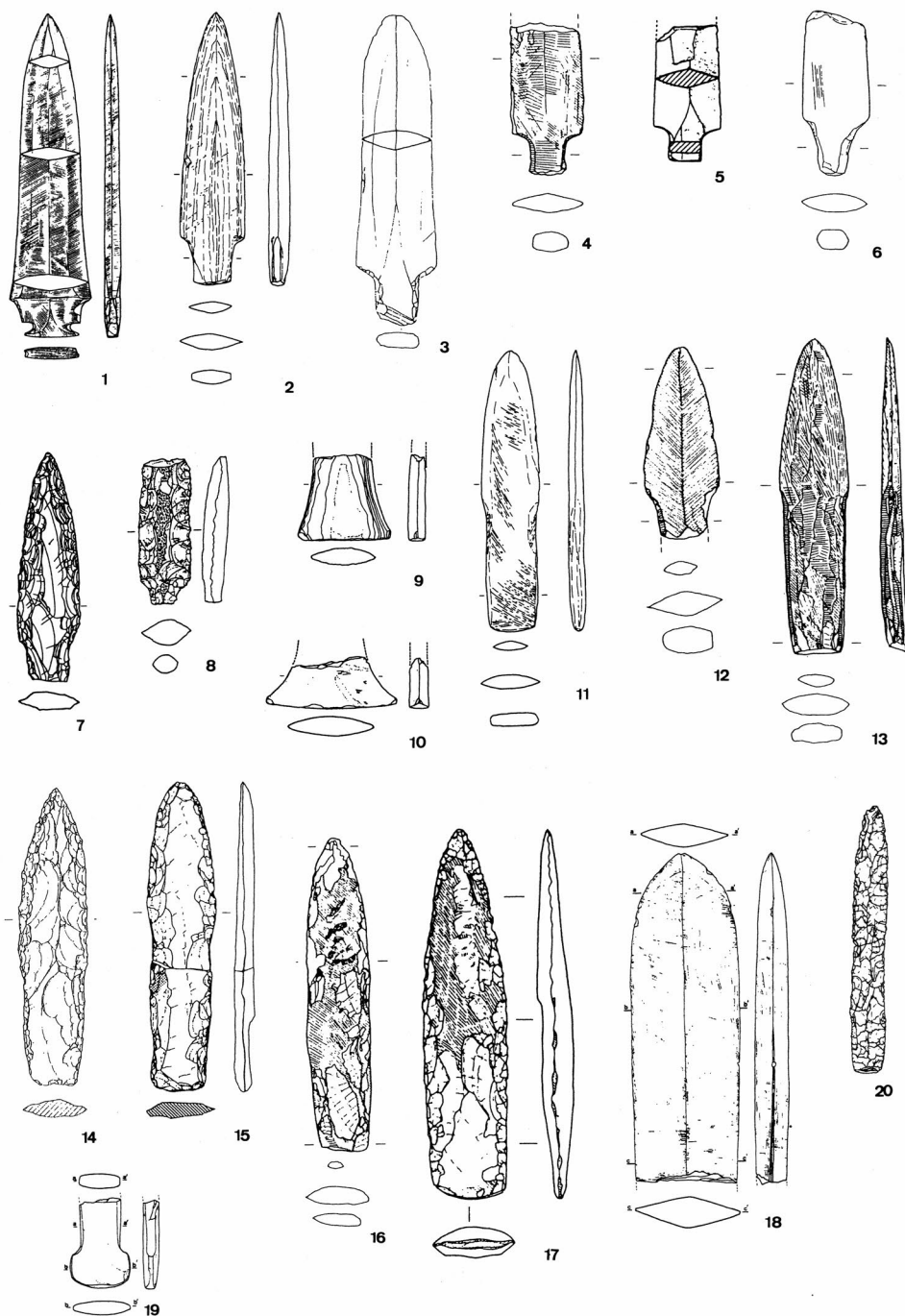
しかし、この分類は石剣の製作址など一連の作業工程を示す遺構中の遺物に対する資料操作時に関しては別儀である。

また、後述するように系譜上中茎部を作り出したものも石剣に含める。

2. 九州、中国、四国地方における縄文時代晩期・弥生時代前期の石剣

日本列島で最も早く石剣が出現するのは北部九州である。縄文時代晩期末(弥生時代早期)に出現し、器形は朝鮮半島からもたらされたものである。佐賀県菜畑遺跡^(注9)の弥生時代早・前期の石剣を見ると、有柄式磨製石剣の柄部下端(第1図9・10)が出土している。第1図1は弥生時代前期初頭の層から出土した石剣で、木柄に装着された石剣とされる。同種^(注10)のものは朝鮮半島でも出土している。短い中茎部を持ち、その両側辺基部に挟り込みが見られる。9は夜白式土器単層から出土し、10は前期後半(板付Ⅱ式)の地層から出土している。有柄式の石剣と木柄に装着するものは、同一遺跡で少なくとも共存していた可能性が指摘できる。石剣には着柄するものと有柄のもの2種類がその初期段階から存在している。このことは1が出土した層位とほぼ同じ時期と考えられる宗像市田久松ヶ浦遺跡^(注11)において、有柄式の石剣が墓壇内から出土していることから傍証される。

中・四国地方で初期に出現する石剣を見ていきたい。愛媛県持田町3丁目遺跡^(注12)では弥生時代前期中葉の埋葬主体部内から石剣が2点出土している。第1図2は着柄式の石剣で縞状の模様を持つ石剣である。中茎部は菜畑例に比べ簡略化されている。第1図11は在地の三波川変成帯内で産出する緑泥片岩で作られた有柄式の石剣である。柄部は刃部に比べ一段幅が狭く、闊部が形成されている。注目すべきは在地石材による生産が開始されている



第1図 各種形態の石剣実測図

- | | | |
|------------------|---------------|------------|
| 1・9・10：菜畑遺跡 | 2・11：持田町三丁目遺跡 | 3：原山遺跡 |
| 4・12・13・16：西川津遺跡 | 5：鱈石遺跡 | 6・8：高宮八丁遺跡 |
| 7：一ノ谷遺跡 | 14：庄蔵本遺跡 | 15：百間川兼基遺跡 |
| 17：布田遺跡 | 18・19：太田遺跡 | 20：雲宮遺跡 |

ことである。弥生時代前半の遺跡から風化面が白くなり、縞状の模様を石剣の主軸方向にもつものが、朝鮮半島・北部九州で見られるが、これらの石剣が瀬戸内地域や山陰地域で発見されることは古くから注目されていた。^(注13)この石剣の動きに注目すると弥生時代前期に西から東へと石器の移動の流れがわかる。

時期が確定しないが、島根県西川津遺跡^(注14)では、在地産と考えられる硬質の黑色頁岩性の石剣が出土している。第1図12・13・16は有柄式の石剣であるが、16は関のないものである。第1図4は茎のつくものである。山陰地方では他に島根県原山遺跡^(注15)では前期と考えられる縞目を持つ石材でできた茎を持つ石剣(第1図3)が出土している。同じ形態のものは島根県鰐石遺跡^(注16)(第1図5)でも弥生時代前期の土器とともに発見されている。

打製のものに目を転じると、関を持ち、柄をつけるのものには香川県観音寺市一ノ谷遺跡^(注17)(弥生時代前期後葉)出土例(第1図7)がある。石材にサヌカイトを利用したもので、素材剥片の腹背面を中央部に大きく残し周辺から整形・調整加工が施されている。

有柄式の打製石剣には徳島県庄・蔵本遺跡例^(注18)(第1図14)があげられる。サヌカイトを用い、若干ではあるが関部が見られる。サヌカイトが打製石器に一般的に用いられる地域では、在地の石材への転化とともに打製のものが存在している。このことは、磨製例が石材変化であったのに対し、打製例は石材変化とともに加工技術の変化を伴っていることを示す。共通するのは柄の部分と、全体形状である。これらはともに石剣の刺突機能を優先した技術適応と考えられる。同様の形態を示す石剣は、岡山県百間川兼基遺跡^(注19)(第1図15)においても出土しているが、弥生時代中期のものであり、この形態は一定期間存続していた。

庄・蔵本遺跡^(注20)では第9次調査において同時期の石剣が出土している。サヌカイトを原材料としているが、加打による整形加工の後研磨が施されている。^(注21)このことは磨製と打製が根本的に異なるわけではなく、技術適応の結果であることを物語っている。

3. 近畿地方の弥生時代前期の石剣

近畿地方では石剣は、弥生時代前期後葉に見られる。京都府雲宮遺跡^(注22)(第1図20)では、弥生時代前期後葉の土壙中から細身のサヌカイト製打製石剣が出土している。基部側には研磨による刃潰しが施される。大阪平野においても山賀遺跡^(注23)・美園遺跡^(注24)等で弥生時代前期の打製石剣が発見されている。

磨製石剣についても弥生時代前期から中期前葉の寝屋川市高宮八丁遺跡^(注25)において、打製石剣と共に磨製石剣(第1図6)が発見されており、茎を持つ形式である。同遺跡から出土した第1図8は茎のある打製石剣の可能性が指摘できる。弥生時代前期末から中期初頭にかけての遺跡である亀岡市太田遺跡^(注26)(第1図19)から粘板岩製の柄部が出土している。共伴

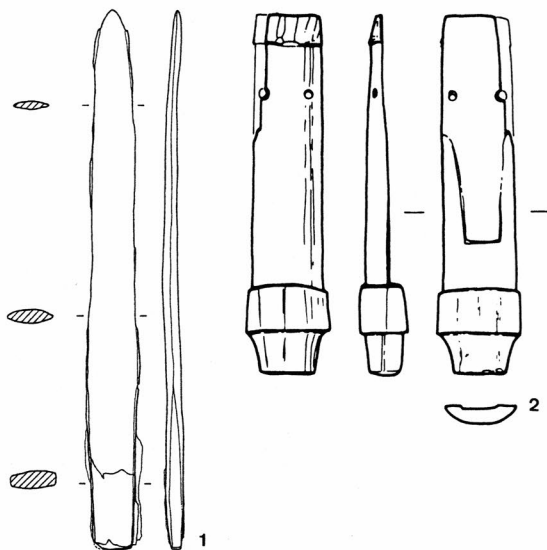
遺物に、通常の法量を持つ石剣のほか大型の在地産粘板岩を用いた磨製石剣も出土している。本遺跡では、近傍から石材を用いた磨製石器製作の一貫した工程が見られることが指摘されている。第1図18は刃部を再生させていることが報告者によって指摘されている。このことは全体形態の中で刃部の形態は、折損による刃部再生によって形態変化し、消費地における平面形態が分類基準とならないことを示す。このことは朝鮮式磨製石剣においても同様である。

4. 金属器模倣の石剣

石剣にはこれまで述べてきたものとは別に銅剣形石剣があり、最も古いものは弥生時代前期後葉の鱈石遺跡のもので、若干器表面が荒れているが縞目を持つ石材を用いている。銅剣形石剣が多く分布している近畿地方では、その出土例は凹線文土器の認められる時期の遺跡にはほぼ限定できる。銅剣形石剣は中細型銅剣を模したもので、その模倣の類似度には個体差が認められるが、明確な時期差は認められない。翼の部分の双孔のみは材質や模倣の度合いを越えて銅剣から継承し木製品にも見られる。^(注27) 鉄剣の関部の双孔とはあけられた位置が異なっているが、着柄することに意義がある器種と想定できる。^(注28) 畿内第3様式後半から第4様式にかけては、通常石剣の多く発見される時期で、いわゆる戦死墓が増加する時期と連動することは興味深い。しかし、その着柄方法から考えると通常打製石剣や磨製石剣との使用法の直接的な関連は認められない。^(注29)

^(注30) 長岡京市裕遺跡の調査から、遺跡の同一地点で有柄式磨製石剣関なしと銅剣形石剣・磨製石鏃・打製石剣が出土している。磨製石器に関するものでは石剣の素材や砥石なども出土しており、両磨製石剣には製作地の違いは認められない。

銅剣形石剣を除く石剣は朝鮮半島の石剣を祖形としていと考えられ、鉄剣形石剣の名称は銅剣形石剣との対語とはならない。兵庫県有鼻遺跡^(注31)(第2図1)出土の鉄剣をもとに、同種のより古い鉄剣が石剣の祖形と考える人もいるが、系統的な解釈下では、製作技

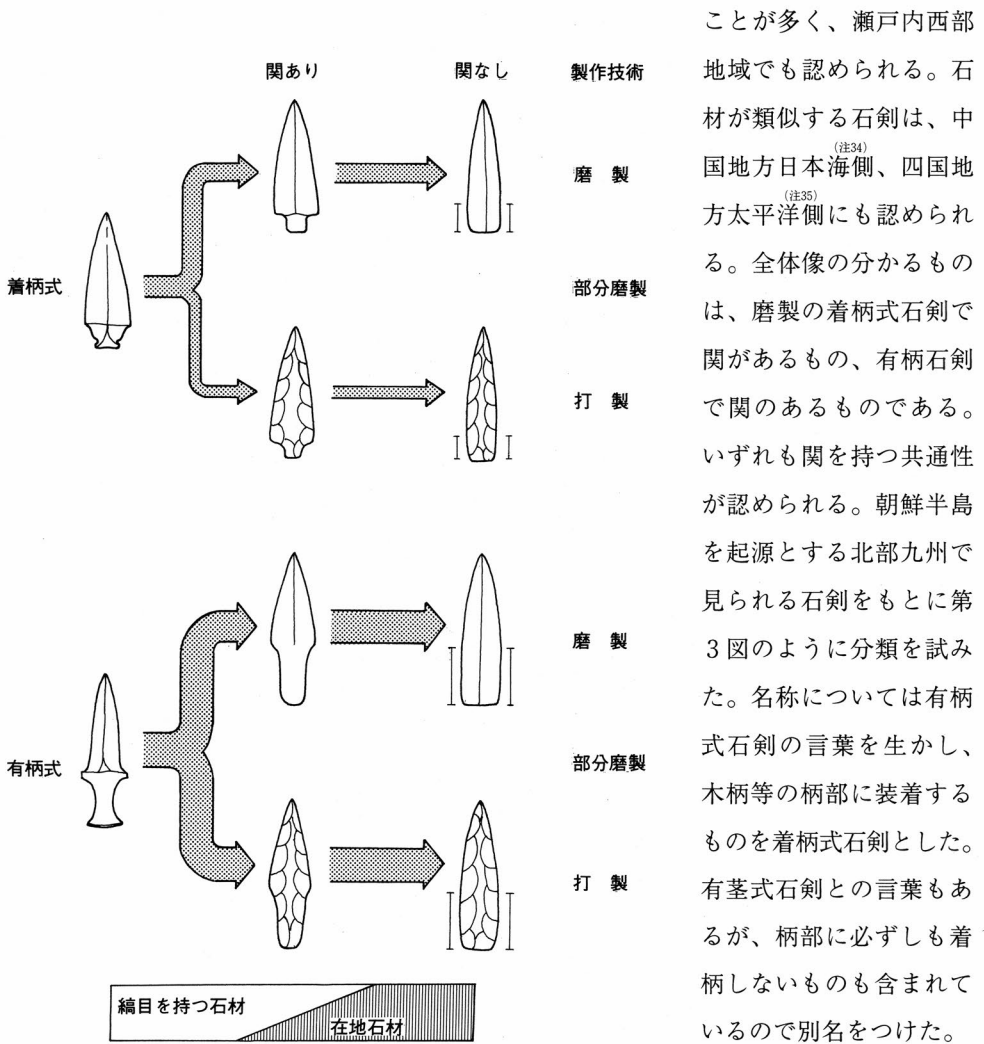


第2図 有鼻遺跡出土鉄剣(1)と
奈具谷遺跡出土木柄(2)

術から見て石剣模倣の鉄剣としたほうが適当である。京都府奈良谷遺跡^(注32)(第2図2)では、図で見られる木製の柄部が弥生時代中期後葉の包含層から出土している。柄部に残された痕跡から鉄剣が装着されていたと考えられる。茎をもち関部に双孔があったと想定される。この形態は朝鮮半島にも見られるもので、弥生時代後期・庄内期にも系譜が残る^(注33)ものである。着柄式で関部、茎部に穴の開く磨製石剣は鉄剣を模倣した可能性が留保される。

5. まとめ

各地域の出現期を中心とした石剣を概観すると、北部九州において朝鮮半島で見られる形態の石剣が夜臼段階に出現している。この石剣は縞目をもつ石材によって作られている



第3図 石剣の分類

この二つの系統を軸に、磨製石剣を関のあるものとないものに分けると、それに対応する打製の石剣が認められる。ただ、これまで管見にして着柄式打製石剣の関のないものは発見していない。概念的には設定できるが、報告書等では石剣基部側側辺の刃潰し加工の明示や範囲が示されることが少ないのが現状である。このことは磨製石剣の関のないもの図面にも共通することである。着柄式磨製石剣の関のないものと考えられる例には石川県小松市八日市地方遺跡例^(注36)があげられる。この分類は必ずしも厳格な編年を示さない。多くのものが供伴、残存することもあるが、系統的に見た変化の方向性という意味では大まかな年代差を示している。また、石剣の型式はさらに細分することが、可能であるが資料数が少なく細分に意味があるとは現時点では考えられない^(注37)。

以上、要点をまとめると、石剣は朝鮮半島からもたらされ、出現期は半島出土のものと同様な形態を示し、同じく2つの系統が認められ、編み目を持つ類似した石材を用いていたが、東に伝播するにしたがって形態・石材・製作技術の変化をもたらした。

- ① 形態は機能部位以外の装飾的加工の簡素化。
- ② 地域内で獲得できる石材の採用。
- ③ 縄文時代から伝統的に保有していた打製石器製作技術への変化。

各形態の石剣はそれぞれ刺突する機能のみを祖形から継承されている。このことは同じく朝鮮半島からもたらされた青銅製武器が、時代が新しくなるにつれて大型化し、刺突機能を喪失して祭器となることとは対照的である。武器自身が持つ機能^(注38)とそれに由来する畏敬の念(精神)の2面性が石剣と青銅製武器では、互いに異なる性質のみを特化させていった結果と考えられる。

考古学に根付く曲解されたV.G.チャイルドの影響に抗するため、エキセントリックな伝播論批判が存在する。本論では祖形の伝播と地域化という観点で分類し、石剣の形態を整理し、その変化の意義を考えた。伝播か自生かと言った常に2律背反的な態度で資料を見るのではなく、どちらの思考が事象をよりよく解釈できるかが問題である。

本論は平成10年の当センター共同研究「京都府下における銅剣形石剣の出現とその背景」の成果を内部研修会で発表した内容を文章化したものである。資料収集に際して、お世話になった各教育委員会・博物館・埋蔵文化財センターの方々に文末ながらお礼申し上げます。

(なかがわ・かずや＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 鈴木道之助 1991『図解石器入門—縄文—』(柏書房)

注2 長沼 孝 1986「磨製石剣・石戈」(『弥生文化の研究』9 雄山閣)、櫛宜田佳男 1986「打製石剣・

- 石槍・石戈」(『弥生文化の研究』9 雄山閣)
- 注3 蜂屋晴美1983「終末期石器の生活とその社会」(『古文化論叢』)、村田幸子1992「近畿地方の弥生時代の成立過程」(『第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器—その始まりと終わり—第6分冊』埋蔵文化財研究会・関西世話人会)、村田幸子1998「打製石剣—大型打製尖頭器—の成立をめぐる問題」(『みずほ』第25号)
- 注4 東大阪市文化財協会1987『鬼虎川の木質遺物—第7次発掘調査報告書第4冊—』
- 注5 旧石器時代の角錐状石器、縄文時代の石鏃は製作址などでの未製品は、完成品の何倍もおおきいことは珍しくない。大型尖頭器に分類されているものには明らかに加工の粗いものも見られる。
- 注6 田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1983『唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』
- 注7 注4と同じ
- 注8 中川和哉1998「桂川右岸における石剣の出土例—東土川遺跡を中心に—」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)、岩崎 誠1991「弥生時代」(『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所)、國下多美樹1994「山城地域の弥生時代石器」(『都城』No. 5 (財)向日市埋蔵文化財センター)
- 注9 唐津市教育委員会1982『菜畑遺跡』、下條信行1991「石製武器」(『日韓交渉の考古学・弥生時代編』)
- 注10 金邱軍1996「韓國式石剣研究」(『湖巖美術館研究論文集1號』三星文化財團)
- 注11 宗像市教育委員会1999『田久松ヶ浦—福岡県宗像市多久所在遺跡の発掘調査報告—』
- 注12 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター1995『持田町3丁目遺跡』
- 注13 下條信行1994「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」(『社会科』学研究』第28号)
- 注14 高根県土木部河川課・島根県教育委員会1988『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)』
- 注15 大社町教育委員会1986『出雲・原山遺跡発掘調査概報』
- 注16 前島己基1973「浜田市鱈石遺跡」『季刊文化財』第22号、浜田市教育委員会1973『浜田商港特定港湾施設整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報 鱈石遺跡』。榊原博英氏から再検討によって弥生時代前期の遺物に限られるとご教示を受けた。
- 注17 (財)香川県埋蔵文化財調査センター1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 一ノ谷遺跡群』
- 注18 大西浩正編1988「庄遺跡(徳島大学蔵本団地内)」(『掘ったでよ阿波』徳島県教育委員会・徳島県郷土文会館)
- 注19 高畑知功1982「百間川兼基遺跡Ⅰ・百間川今谷遺跡Ⅰ」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会)
- 注20 徳島大学埋蔵文化財調査室編1998『庄・蔵本遺跡1—徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査—』

- 注21 部分磨製するものは、その加工の精粗に関わらず、研磨による刃部形成に関して執着がみられず、剝離面が残されていることが多い。このことは本文でも述べたように石剣が鞘に入っていることを前提とするならば、木製の鞘が常に石器の数だけ存在するのではなく、石器の破損によって石器が取り替えられる。鞘に合わせるため厚みを減少することに主眼が置かれている可能性が指摘できる。打製石器の場合、二次加工による剝離によって打撃面と作業面の剝離角が大きくなることにより、剝離面末端がステップ(階段)状を呈し、加工が困難となる。栗田 薫(1995「打製石剣の製作技術」『大阪府弥生文化博物館研究報告』第4集)は、二上山周辺地域では鉄製あて具によってこの階段状の部分を取りに除き厚みを減じる例があることを指摘している。磨製技術はこれと同じ効力をもっていたとも考えられる。
- 注22 中川和哉・田畑直彦他1997『京都府遺跡調査報告書第22冊—雲宮遺跡—』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注23 (財)大阪文化財センター1983『山賀(その3)—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査概要報告書—』
- 注24 (財)大阪文化財センター1985『美園—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査概要報告書—』
- 注25 寝屋川市教育委員会1988『高宮八丁遺跡 石器編』
- 注26 村尾政人・田代 弘他1986『京都府遺跡調査報告書第6冊—太田遺跡—』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注27 種定淳介1990「銅剣形石剣試論(上)」『考古学研究』第36巻第4号、同1990「銅剣形石剣試論(下)」『考古学研究』第37巻第1号
- 注28 注8に同じ
- 注29 岡山市教育委員会1997「上伊福・南方(済生会)遺跡(南方蓮田調査区Ⅱ)」(『岡山市埋蔵文化財調査の概要1995(平成7)年度』)
- 注30 中島皆夫2000「右京第624次(7 ANRUI-3地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)
- 注31 兵庫県教育委員会1999『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅵ—有鼻遺跡(1)—』
- 注32 柴曉彦1997「奈具谷遺跡」『京都府遺跡調査概報第76冊』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注33 川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』(雄山閣)
- 注34 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館編1993『平成5年度特別展古代の島根と四国地方』
- 注35 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館編1989『89特別展古代の出雲と四国地方』
- 注36 小松市教育委員会1999「小松の重要遺跡・遺物⑨」(『小松市埋蔵文化財調査だより』第9号)
- 注37 基部の形状の違いによって分類することも可能であるが、打製石剣の場合高い確率で、末端に自然面が残されそれを取り除こうとはしていない。打製石剣は剝片を素材としており、その剝片の形状が石剣を作る際に基部側に一次剝離によって出来た鋭い縁辺が来るとき、または形状が不安定である場合に、調整加工が施されている。このことは、鞘に収まっていない有柄式打

製石剣の基部末端によって外傷を受ける事を防いでいるだけで、形状について注意が払われていないことを示す。磨製石剣の鑄の有無であるが、これもまた自由自在に製作者が意図したというよりも、素材となった剝片の形状に起因し、多くの場合はその厚さが原因となる。東土川遺跡(中川和哉1995「銅剣形石剣に関する2、3の問題点—京都府出土資料を中心に—」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)出土の石剣の中には、片面には鑄があり裏面には素材剝片の剝離面の形状によって鑄が見られないものも存在している。

石器研究においては「かたち」論からの脱却が必要とされる。形を成り立たせているものはその形が類型化できるものであるならば、その前段階からの技術的裏づけが必要となり、製作のプロセスを語らなければならない。魔法のハンマーや砥石で自由自在に物は作れない。

- 注38 村田幸子(1998「「打製石剣」—大型打製尖頭器—の成立をめぐる問題」『みずほ』第25号)は打製石剣、磨製石剣を「儀器」と位置付けているが、東土川遺跡(注28)で発見された縦方向からの衝撃で剝離された石剣鋒の微小剝片が射込まれたと考えられる石鏃と共に発見されることや、同様に先端部のみが残される事象から武器として利用されていたことは明らかである(中川和哉1999「弥生時代の石製武器出土埋葬主体部—京都市東土川遺跡例から—」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学実習室)。また、環濠から見つかる例も少なくはない。根拠にされている方形周溝墓周溝からの出土例では、東土川遺跡(野島 永編2000『京都府遺跡調査報告書第28冊—長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡—』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)・池上遺跡(中川和哉他2000「池上遺跡第5次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第91冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)では石斧の整形途中のもの、石斧・石包丁・石鏃・剝片が出土している。これも儀器であるのか?近畿地方では“上位レベル”の「儀器」銅剣が周溝から完形で見つかった例も管見にして知らない。また、経験的に方形周溝墓周溝内の埋葬の発見は非常に難しく、埋葬主体部内に石剣が入っていた可能性も指摘できる。石剣が儀式に用いられた可能性は否定しないが、「儀器」は用途が儀礼に限られるか、主に用いられる場合に限定に用いなければならない。

自分たちの理解領域内で考えられないものを「祭祀」などの精神領域に先見的に結びつける近年の弥生時代研究の風潮は、思考の停止と宗教にも似た不可侵な前提を作り出し、考古学的手法の衰退につながる。そこにあるのは「私は祭祀と考えたい!」という意思だけである。解釈の連鎖は事実を必要としない世界への跳躍を意味する。祭祀と名づけられる要件は、「神・祖霊まつり」がなされたかどうかを考古学的に証明することである。

追記

本論を文章化する途中に、村田氏の論考を拝見し、関部による分類がなされていることを知った。分類基準は村田氏が先行して触れておられることを文末ながら記しておくたい。